

乳幼児と小学生のふれあい事業に関わった民生児童委員の思い —地域と大学が協働で行った次世代育成支援事業の効果—

鈴木学美^{1*}、増野眞貴^{2*}、岩本里織^{3*}、大野かおり^{3*}、田中由紀子^{2*}、
高田昌代^{3*}、岡永真由美^{3*}、安積陽子^{3*}、安達久美子^{3*}、谷川裕子^{3*}、
林 裕子^{3*}、半田浩美^{4*}、蝦名美智子^{5*}、二宮啓子^{3*}、
廣瀬美千子^{6*}、植本雅治^{3*}

^{1*}神戸市看護大学(前), ^{2*}神戸市西区役所, ^{3*}神戸市看護大学, ^{4*}長野県立こども病院,
^{5*}札幌医科大学, ^{6*}神戸市立長坂小学校

キーワード：次世代育成支援, 民生児童委員, 住民主体, 子育て支援, ヘルスプロモーション

A Child Welfare Commissioner's Perspective After Activities with Infants and Primary School Primary School Children :Effects of a Joint Community and University Project to Foster the Next Generation:

Manami SUZUKI^{1*}, Maki MASUNO^{2*}, Saori IWAMOTO^{3*}, Kaori OHNO^{3*}, Yukiko TANAKA^{2*},
Masayo TAKADA^{3*}, Mayumi OKANAGA^{3*}, Yoko ASAKA^{2*}, Kumiko ADACHI^{3*},
Yuko TANIGAWA^{3*}, Yuko HAYASHI^{3*}, Hiromi HANDA^{4*},
Michiko EBINA^{5*}, Keiko NINOMIYA^{3*},
Michiko HIROSE^{6*}, Masaharu UEMOTO^{3*}

^{1*}Kobe city college of nursing(before), ^{2*}Kobe city west ward office, ^{3*}Kobe city college of nursing,
^{4*}Sapporo medical university school of medicine school of health science,
^{5*}Nagano children's hospital, ^{6*}Nagasaka Kobe municipal elementary school

Key words : the next-generation promotion support, Welfare commissioner, resident subject, child-nurturing support, health promotion

1. はじめに

近年、子どもを生まない夫婦の増加や育児不安をもつ親の増加、児童虐待などが社会的な問題となっている。この要因の1つに、現代の親世代は乳幼児と直接ふれあう体験がないまま大人になったため、子どもにかかわることを不安に思うこと、子どもへの接し方がわからないことがあげられている(原田, 1999)。このような中、次の世代に父親・母親となる小・中学生が、乳幼児と直接ふれあう機会をつくることにより、乳幼児のもつやさしさ・あたたかさ・純粋さを知り、命の大切さや他人への思いやりを体験的に理解できるような次世代育成支援が、全国的に注目されてきている(原田, 2005)。これは、次代を担う子どもやこれ

を育成する家庭を社会全体で支援することを目的として平成15年に制定された、次世代育成支援対策推進法に則った政策である(厚生労働省, 2003 柏女, 2005)。

一方、子育てに関する問題や次世代育成には、行政や専門職が事業を展開するだけでなく、地域の人々の手で実施していくことが求められている(藤内ら, 2001)。神戸市A区のB地区では、民生委員児童委員協議会(以下民児協)が平成15年度から乳幼児をもつ母親を対象とした子育て支援活動を行ってきており(詳細後述)、地域住民を主体とした活動が形成されつつある。この背景のもと、神戸市A区保健福祉部では、平成16年度に小学5年生が乳幼児とふれあう次世代育成支援事業(以下<命の感動体験>)を企画し、B地区をモデル地区として選定し、実施した。これは

民児協のこれまでの活動を活かし、今後民児協が地域の子育て支援の中心的役割を担っていくことを目指したものである。

そこで本研究では、民児協に協力を求め、彼らの活動を基盤として地域で次世代育成支援事業を展開したことに対する民児協各委員の活動への思いや彼らの活動への影響を明らかにすることを目的にした。これをもとに今後の民児協の主体的な活動の方向性を考察する。

なお、＜命の感動体験＞は、A区保健福祉部子育て支援係を中心に企画し、民児協、神戸市立C小学校、神戸市看護大学が協力して実施しているものである。

2. 民児協の子育て支援活動の経緯

神戸市A区は、平成12年度国勢調査によると年少人口が17.4%、全世帯数に対する核家族世帯割合も68.8%であり、両者とも市内で最も多い地域である。加えて、6歳未満親族のいる割合も17.4%であり市内で最多である。A区は幼い子どもを持つ核家族世帯が多い地域といえる。このA区B地域において、民児協のうちの主任児童委員が個別の母子に対する子育て支援を実施してきた。しかし、地域の母親が孤立することを懸念し、民児協全体の事業として、平成15年4月に親同士の情報交換や子ども同士も仲間作りができる場である「おやこの広場」（対象2歳児まで）をC小学校学童保育コーナーに開設した。その後、3歳を超え「おやこの広場」の対象ではなくなった母子の集う場がなくなるのではないかとというような不安の声が聞かれるようになったため、平成16年5月に「イキイキ子育て広場」（対象2歳以降4歳まで）を開設し、両広場を並行して開催している。

このような中、＜命の感動体験＞をC小学校で開催する際に、C小学校学童保育コーナーで開催していた「おやこの広場」に参加している乳幼児保護者に参加を呼びかけ、開催に至った。

3. 研究方法

(1) 調査対象

調査対象は、民児協各委員のうち、研究協力への同意が得られた者とした。調査協力にあたって、民児協会長に調査協力を依頼し＜命の感動体験＞に関わった民児協各委員への調査協力を求めた。

(2) 調査方法

調査対象者8名を1グループとし、以下の項目について、フォーカスグループインタビューを行った。

- ① 次世代育成支援事業協力依頼を受けたときに感じたこと
- ② 次世代育成支援事業に実際に関わった感想
- ③ 参加した乳幼児の保護者や、地域住民からの反応
- ④ 今後の次世代育成支援事業への展望

なおインタビュー内容は、調査対象者の許可を得て録音した。

(3) 調査時期

平成16年11月

(4) 分析方法

インタビュー内容を逐語録にし、民児協各委員が次世代育成支援事業に参加して感じたことが述べられている内容を抽出し、析出された内容を【 】で表わした。

(5) 倫理的配慮

研究の主旨、目的、研究結果の使い方、同意の有無が今後の活動に不利益になることは一切ないこと、本研究で得た情報は匿名で処理し、共同研究者以外の目に触れることはなく、また研究以外の目的で使用されることはないよう厳重に管理されることを記した研究協力依頼文を、調査協力依頼時に配布し、研究者が口頭で説明した。その後、研究協力の同意が得られた者と、同意書を交わした。

4. 結果

(1) 対象者の概要

対象者は16名、うち男性2名、女性14名であった。年代別には、40代1名、50代8名、60代7名であった(表1)。民児協での活動年数は、5年までが7名、5年から10年までが7名、10年以上が2名であった(表2)。

表1. 対象者の年代

年 代	人 数(人)
40代	1
50代	8
60代	7

表2. 民児協での活動年数

活動年数	人数(人)
5年まで	7
5年～10年	7
10年以上	2

<命の感動体験>への参加回数は、1回4名、2回7名、3回2名、4回3名であった。

(2) 次世代育成支援事業への協力依頼を受けた際の感想

民児協が、A区保健福祉部子育て支援係より<命の感動体験>への協力依頼を受けた際、前年度から0歳から2歳までの親子対象の「おやこの広場」が実施されており、さらに今年度から2歳から4歳の親子対象の「イキイキ子育て広場」が実施予定であったため、当初【活動が増えることへの危惧】が強かった。

「やはり最初には、ここで民児協が『子育て』（おやこの広場）をしていましたし、この4月からまた新しいのが始まるっていうことだったので、大変だなあって、一番に大変だなあって」

また、「おやこの広場」や「イキイキ子育て広場」は、現在子育て中の親に対する子育て支援であるが、今困っている者への支援ではなく次世代の親を育成するという内容が理解できず、【事業の具体的なイメージがわからないことへの不安】も抱いていた。

「パート1の子育ての方がかなり忙しかった時期と、今言われたお話（<命の感動体験>）の時期と重なって、そういうものがどんなものかどうなのかの違いをね、もう一つ、はっきりわからないし、目に見えないような感じ」

乳幼児保護者に対しては、自分の子どもを5年生児童に差し出す気持ちを慮って、【乳幼児を児童に扱われる乳幼児保護者への配慮】があった。

「お母さんたちの協力のもと、納得してもらえるかどうかというそのやっぱり、その説得する側みたいなね、やっぱりどうしてもイメージ的に言えばあのお母さんの子どもさんを貸して下さい、・・・そういうイメージだけで最初ね。そんな風に思ってたんで」

このように、<命の感動体験>への協力依頼を受けた際は、事業に対してマイナスのイメージがかなり先行していたことが伺えた。しかし、少子化できょうだいも少なく、周囲に乳幼児がいないと思われる5年生児童に、乳幼児とのふれあいの機会をつくるというこの事業は、おもしろい試みであるとも感じており、【事業に対する期待感】も聞かれた。

「それ自体はね、あゝ面白い取り組みだなんて思いましたよ。最近はいじめたり、親が考えられないようなことしますよね」

(3) 次世代育成支援事業に実際に関わっての思い

①次世代育成支援事業の意義の確認

民児協各委員は、実際の事業での5年生児童の反応から、小さなきょうだいがいる児童は最初から乳幼児に近づき扱いもうまいが、多くの児童は始めは乳幼児に近づくこともためらっていることがわかり、【少子化など時代背景から見た事業の重要性】を感じていた。

「あの今一人っ子とか、きょうだいが少なくて、昔みたいにたくさんいましたらね、色々なことも入ってきますけど。だから珍しそうに抱くこともようしない、のぞいたようにする子と。やっぱりきょうだいもってる子どもは、近寄っていく」

次第に児童の緊張もほぐれ、児童が非常に良い表情で楽しそうに乳幼児とふれあっているのを見て、【児童へのよい効果の理解】も感じていた。また、5年生という思春期の入り口であり、授業でも体のことを習う時期に、子どもが生まれ育つ段階を体験的に知ることとは必要であると考え、【5年生に実施することの効果の理解】についても確認していた。

「すごくね、子どもさんがね。小学校の子どもさんがあんだけ盛り上げるんやから、すごいなと思います」

「5年生の小学校の先生にもね、（聞いたら）そしたら理科にも体のことも出てくるし、保健にも出てくる、丁度思春期の入り口という風に小学校の特徴を聞いたんです。そういう时期的にも、赤ちゃんの誕生からいろいろ育つ段階を知るのもすごくいい時期って、すごく入りやすい時期」

開催時期について、「おやこの広場」を始めて1年経過した頃であり、乳幼児保護者と民児協の関係ができていたため、〈命の感動体験〉にも乳幼児保護者が入りやすかったのではないかと考え、【開催時期が適当であった】と感じていた。またこのことより、「おやこの広場」で形成された乳幼児保護者と民児協の信頼関係を基盤として〈命の感動体験〉が成り立っていると感じ、【本事業で民児協が果たす役割】を、民児協自身が再確認することにもつながっていた。

「これ（〈命の感動体験〉）が始まるのが、時期的にも良かった。『子育て』（おやこの広場）を始めてある程度、お母さんも子どもさんも集団の雰囲気慣れたぐらいに、これが入ってきたからちょうど、良かった」

「私も受付してもらったりするんで、そしたらやっぱり一番最初に、会うのがお母さんとお子さんなんですよ。そしたらもう顔覚えてもらって、で、私も覚えてるし、そこで最初の交流をして入っていただく。そういった形でね、どっかで知った人がおるというのはね、いいんかなって。まあね、少しぐらいでもお役に立ってるんかなって思ったりしながら」

②児童や乳幼児保護者の新たな一面の発見

民児協は事業に関わる中で、これまで知らなかった児童や乳幼児保護者の新たな一面を発見していた。児童が、乳幼児保護者に敬語を使ったり礼儀正しく接しているのを見て、【児童の、乳幼児や乳幼児保護者への優しさ、気遣いへの気づき】があった。また、児童が乳幼児保護者から出産や子育ての話聞き、自分の親も大変な思いをしながら自分を育ててくれたと感じていることを知り、【児童に、自分の母親への思いやりが生まれていることへの気づき】もあった。

「男の子なんか外で遊んでると中入ってきたときと、あの物の言い方もちゃんと少し丁寧語でしゃべってくれてるのね。子どもたちなりに気遣ってるんだなってことは感じましたね」

「生徒さんは、お母さんが大変やったんやな一いつ感じはもって帰られてますわ。もうだから（母親への）見方が違って来るんじゃないかと思う」

乳幼児保護者については、当初乳幼児を児童に差し

出すことに親は抵抗を感じるのではないかと危惧していたが、事業に入ってみると乳幼児保護者は積極的に児童に乳幼児を抱かせており、【乳幼児保護者の、児童の乳幼児の扱いに対する寛大さへの驚き】があった。また本事業に何度も参加している乳幼児保護者は、回数を重ねる毎に児童への接し方が慣れてきて、児童への出産や育児に関する話を用意してくるなどしているのを見て、【乳幼児保護者が、児童を育てていることへの気づき】もあった。

「対象がね、5年生のお子さんということで、どういう扱いをされるのかなというのがあの、だからまず、お母さんよりもなんか思ってしまった、でもお母さんの方が案外、すごい寛大だっているのか、あのどういう扱いをされようがっているのか、平気どころ、あのここはこうよって、問いかけてはるのを見て、すごいこちらの方があのびっくりした・・・」

「もうねーすごく子どもをちゃんと育ててる。小学生をね。その辺をね、やっぱり参加するごとに（おやこの）広場の方に出たらやっぱり自分があの勉強したい、こっち（〈命の感動体験〉）に来たら自分も勉強もするけど教えたいという意識に変わってるんやないかな」

(4) 事業に関する課題

民児協は、実際に事業に関わって、事業の意義を確認したり、児童や乳幼児保護者の新たな一面を発見したりしていたが、同時に事業に関する課題も感じていた。参加した児童や乳幼児保護者の反応から、民児協は本事業の意義や必要性を感じているが、地域の中では本事業はあまり知られておらず、【本事業は知名度が低い】と感じていた。

本事業で民児協が果たす役割について、乳幼児保護者の反応から民児協自身が再確認していたことを前述したが、逆に行政や看護大学など多機関が関わった本事業では、民児協の役割が明確でなく、【事業における役割が不明確】と感じている者もいた。

「（地域からの反応などは）聞いたことない」

「最初は、私らは行って受付ぐらいの手伝いでいいと思ってて、ほんで今度、どこまで関わったらいいのかなって、思ったんです。関わり方がわからない、っていうか、民生としてどこまで関わったらいいのかなって

ていうのが、いまだにちょっとわからない状態なんです」

(5) 事業の今後への展望について

民児協は前述の通り、事業に関わり児童や乳幼児保護者の反応を見て、本事業の意義や必要性を強く感じており、さらに多くの児童や乳幼児保護者に参加して欲しいという【事業拡大への意欲】を多くの者が感じていた。また事業に関して、時間が足りない、おもちゃが欲しい、場所が狭いというような【事業に関する細かな要望】に関する意見もあった。

「まだね知らないお母さん沢山いらっしやると思うんで、やっぱそういう方にもう少しく、情報提供して参加していただく、ってすごくいいことかなって」

「まーあんまり長けりゃいいっていうもんでもないんだけど、多少時間に追われてるっていうところもありますね。それと場所的な設定でちょっと狭い、もう少し広くてのびのびしたところでされた方がいいかなっていうのはありますね。ええ。それとやっぱり、あのお金も大変だろうと思いますけど、いろんな設備投資みたいなんでできれば、もっとやりやすいかなって思いますし」

結果をまとめたものを表3に示した。

5. 考察

民児協では当初、少子化、近隣との関係の希薄化により、地域ぐるみで子育てが難しくなったことから、このような次世代育成支援事業の必要性は感じていた。しかし、現在子育て中の乳幼児保護者への支援活動に追われ、これ以上自分たちの活動が増えることに対しては「大変だ」というマイナスイメージを持っていたようであった。また、目の前の困っている対象者に手を差し伸べる活動ではなく、次世代の親を育成するということが実際どのように行われるのか理解し難く、現実味のなさを感じていた。

民児協が実際に事業に関わったことにより、本事業の意義を強く感じられたようであった。少子化できょうだいも少なく、乳幼児と触れ合う機会がない児童に対して、本事業のように実際に乳幼児に触れ、乳幼児について理解する体験を持つことの重要性を認識していた。児童や乳幼児保護者の新たな一面を発見し、児童や乳幼児保護者を理解するきっかけとなっていた。民児協が事業を通して発見した、児童の優しさや思いやり、乳幼児保護者の寛大さや児童を育成している意識は、児童や乳幼児保護者の持つ「力」とも言える。このような「住民の力」を活かした住民主体の地域組織活動が、現代の子育て支援や次世代育成支援に関する活動に求められており、地域組織活動の中心である

表3. 調査結果一覧

協力依頼を受けた際の感想		<p>【活動が増えることへの危惧】</p> <p>【事業の具体的イメージがわからないことへの不安】</p> <p>【乳幼児を児童に扱われる乳幼児保護者への配慮】</p> <p>【事業に対する期待感】</p>
命の感動体験に実際に関わったの思い	意義の確認	<p>【少子化など時代背景から見た事業の重要性】</p> <p>【児童へのよい効果の理解】</p> <p>【5年生に実施することの効果の理解】</p> <p>【開催時期が適当であった】</p> <p>【本事業で民児協が果たす役割】</p>
	児童や乳幼児保護者の新たな一面の発見	<p>【児童の、乳幼児や乳幼児保護者への優しさ、気遣いへの気づき】</p> <p>【児童に、自分の母親への思いやりが生まれていることへの気づき】</p> <p>【乳幼児保護者の、児童の乳幼児の扱いに対する寛大さへの驚き】</p> <p>【乳幼児保護者が、児童を育てていることへの気づき】</p>
事業に関する課題		<p>【本事業は知名度が低い】</p> <p>【事業における役割が不明確】</p>
今後への展望		<p>【事業拡大への意欲】</p> <p>【事業に関する細かな要望】</p>

民児協の活動の継続に力を与えるものとなるを考える。

この事業を協働で開催しているA区保健福祉部子育て支援係や大学関係者は、民児協が今後地域の子育て支援の中核を住民の立場で担っていくことを意図して関わってきたという背景がある。本結果に示されたように、民児協は、この事業の協力依頼を受けた当初は、事業に対する不安が大きかった。事業を進めるに従い事業の意義を確認できるようになり、児童や乳幼児への良い効果が得られているのを感じるようになった。そのような効果ゆえか、事業の拡大への意欲も見られている。この事業への協力をきっかけに、今後彼ら自身がこの〈命の感動体験事業〉を中心的に実施したり、さらには地域の子育て支援の中核を担ったりという発展的展開も期待できるのではないかと考える。

一方で、大学などの多機関が参入することによって、役割が不明確となり戸惑っている者もいた。多機関が事業に関与することで、多角的に対象へのアプローチや評価ができるというメリットはある。しかし各機関の役割や分担範囲が明確でなければ、事業に関与しても達成感につながらず、継続した事業展開になり得ない。各機関の役割や分担範囲について、事前および実施毎の調整と意思統一が必要である。

本事業に対する地域での反応は調査時点ではあまりなかったが、事業を終えて民児協各委員が本事業の意義や必要性を強く感じ、事業の拡大も望んでいる。今後も本事業を継続することにより、少しずつでも地域の育児力を向上させることにつながっていくのではないかと考えられる。

近年、ヘルスプロモーションの理念「人々が自らの健康をコントロールし、改善することができるようにするプロセス（島内，1990）」に基づいた、住民主体・住民参加の促進を目指したコミュニティづくりが求められている。コミュニティの発展には、「自助および社会的支援を強化し、健康問題への市民の参加とその指導を強化する柔軟なシステムを開発しなければならないが、そのためにはコミュニティに現存する人的・物的資源が頼りである（島内，1990）」とオタワ憲章が提唱しているように、現存する人的資源を最大限活用して住民主体の地域活動を強化していく必要がある。C地区の子育て支援活動における民児協の存在は、まさに地域の子育てを担う有効な人的資源であり、今後も民児協を中心とした子育て支援活動および次世代育成支援事業が継続され、地域の育児力を向上させてい

くことが望まれる。

引用・参考文献

- 1) 原田正文(1999): みんな「未熟な親」なんだーグループ子育てのすすめ, 森文協.
- 2) 原田正文(2005): 子育て現場の実態に即した次世代育成支援策を!ー「大阪レポート」から23年後の子育て実態調査「兵庫レポート」が示すもの, 発達, 101号:24-27.
- 3) 次世代育成支援対策推進法
<http://www.mhlw.go.jp/general/seido/koyou/jisedai/suisin.html>
- 4) 柏女霊峰(2005): 次世代育成支援・子ども家庭福祉施策のゆくえー少子化対策から人間福祉への道のりー, 月刊福祉, 5月;16-19.
- 5) 島内憲夫(訳): ヘルスプロモーションーWHO: オタワ憲章, PP1, 垣内出版, 1990
- 6) 藤内修二、岩室紳也(2001): 保健策定マニュアルーヘルスプロモーションの実践のためにー, 株式会社ライフ・サイエンス・センター.

(受付: 2005.11.30; 受理: 2006.2.9)